

荘園調査と web 公開—備中国新見荘から美濃国大井荘へ—

主催：早稲田大学総合人文科学研究センター研究部門「トランスナショナル社会と日本文化」

共催：科学研究費基盤研究(A)「既存荘園村落情報のデジタル・アーカイブ化と現代の IT 環境下における研究方法の確立」

日時：2018 年 9 月 5 日（水）12:50-18:30

場所：早稲田大学戸山キャンパス 33 号館 第 1 会議室

司会：海老澤衷（早稲田大学文学学術院教授）

報告：第 1 部 荘園現地調査と多層荘園記録システム

山田仁生（早稲田大学大学院博士後期課程）

「小字図・水路図のレイヤー活用と大井荘」

久下沼譲（早稲田大学大学院研究生）

「航空写真図の活用と荘園復原」

土山祐之（早稲田大学大学院博士後期課程）

「灌漑と水害から荘園を見る」

赤松秀亮（早稲田大学大学院博士後期課程）

「都市化した荘園故地で中世村落をさがす」

第 2 部 画像・地形図・地理情報ソフトの応用的活用

高橋 傑（慶応義塾普通部教諭）

「地租改正大絵図と近世・近代の耕地」

鈴木瑛莉（esri ジャパン）

「歴史・考古学分野における GIS の活用について」

黒田 智（金沢大学教授）

「合戦図屏風の村落景観—杭瀬川合戦と笠縫堤—」

2018 年 9 月 5 日、早稲田大学総合人文科学研究センター研究部門「トランスナショナル社会と日本文化」では、シンポジウム「荘園調査と web 公開—備中国新見荘から美濃国大井荘へ—」を開催した。

冒頭、司会より趣旨説明が行われ、その後、2 部構成で 7 報告が行われた。

「第 1 部 荘園現地調査と多層荘園記録システム」では、科学研究費基盤研究(A)「既存荘園村落情報のデジタル・アーカイブ化と現代の IT 環境下における研究方法の確立」（研究代

表者：海老澤衷、2015 年度～2018 年度）および、科学研究費基盤研究(B)「備中国新見荘における総合的復原研究」（研究代表者：海老澤衷、2010 年度～2013 年度）における荘園故地の現況調査から得られた成果に関する報告が主なテーマとなった。山田報告では、美濃国大井荘（現岐阜県大垣市）をフィールドとして共同研究を進める際に作成した図面「大井荘域小字図」および「大井荘域灌漑図」の作成過程を説明した。久下沼報告では、備中国新見荘（現岡山県新見市）における航空写真を活用した景観復原の作業過程を述べた上で、荘園研究への具体的な活用事例から、その分析手法の有効性を提示した。なお、久下沼報告は、最新の高機能 GIS ソフトである ArcGIS（米国 esri 社）の活用により、以前の調査対象地域における景観復原の新たな可能性を探った点で、重要な成果となった。土山報告では、都市化された荘園故地である大垣市における灌漑・水利の復原成果を示し、中世に遡及しうる水路の存在を指摘した。その上で、調査成果の現代的な活用の可能性を論じた。赤松報告では、これまでの大井荘研究において南北朝・室町期の史料に見られる地名が活用されてこなかったことを研究史上の課題として、中世後期段階での集落地名の検出と所在の比定作業を行い、現代に至る景観の変遷過程を探った。上記の作業を通じて、城下町にのこされた中世大井荘の痕跡の輪郭が浮き彫りとなった。

「第 2 部 画像・地形図・地理情報ソフトの応用的活用」では、新たな技術・視角からの景観復原が主なテーマとなった。高橋報告では、上野国新田荘（現群馬県太田市・みどり市・伊勢崎市）・美濃国大井荘をフィールドに、荘園景観の復原作業上、重要な史料である地籍図を GIS 上で利用することにより、どのような成果を得ることができるのか、具体的な活用事例を示した。その際、近代初頭の地図が慎重を期しながら現況地図に重ねられていくプロセスは、GIS を活用した研究を行う者にとって示唆的であった。鈴木報告では、ArcGIS を用いた歴史・考古学研究への活用事例を紹介した。その際、これまでの歴史・考古学分野における GIS ソフトの利用は、調査成果を地図上に反映させるためのデータ作成が主であり、ArcGIS が持つ分析機能を積極的に活用していくべきとの指摘は、今後の研究を進めていく上で貴重な提言となった。黒田報告では、鎌倉期にはその存在を確認でき、杭瀬川の氾濫が大井荘に流入するのを防ぐ役割を果たした笠縫堤について、「関ヶ原合戦図屏風」（津軽本）を活用して堤周辺の村落景観を復原した。これまで、荘園・村落の景観復原は中世の荘園絵図や近世の村絵図を用いて行われてきた。そうしたなか、「関ヶ原合戦図屏風」の空間構成を様々な史料と共に読み解き、現況の図面に視角化した黒田報告は、新たな研究の可能性を感じさせるものであった。

以上の 7 報告を踏まえ、約 1 時間に渡って行われた討論では、参加者から積極的な質問や提言がなされ、シンポジウムは盛会のうちに終了した。なお、参加者に対して本シンポジウムへのアンケートを実施し、討論だけでは論じきれなかった様々な課題について示唆的な意見を得ることができた。

（記録：赤松秀亮）

シンポジウムの様子

